

『コレはアレの仕事だから』
作・岩本憲嗣

■登場人物

石井正光(15) 麻耶の祖父
石井麻耶(22) 石井の孫
石井里子(49) 麻耶の母親
木村光子(70) 石井の知人

○石井家・庭

石井正光(15)が空を眺めている。
石井の足元にじゃれつく仔猫。
空には飛行機が一機飛んでいく。

○同・台所

石井麻耶(22)が電話をかけている。

麻耶「え？全然大丈夫だって。そんないちいち電話かけてこなくていいのに」
里子の声「そんなこと言ったっておじいちゃんあんじゃやない。上手くないことない？」
麻耶「まだ一日目だよ？そんなの分からないって。心配しなくて子供頃は一緒に住んでたんだしさ」
里子の声「おばあちゃん亡くなった後のおじいちゃんのことよく知らないからよ」
麻耶「そんなのは別にいいからさ。楽しんできなよ。あ、お土産はマカダミアナッツのチョコ以外ね」
里子の声「はいはい。そうだ。あたし達熱海に行ってることになってるから、おじいちゃんに本当の事いったら駄目よ」
麻耶「え？なんでそんなややこしいこと？」
里子の声「ほら、飛行機乗るっていったら…ね？」
麻耶「ああ、なるほどね」

電子レンジがチンと鳴る。

麻耶「ああ出来た。ごめん、じゃ、もう電話しなくてもいいからね」

麻耶電話を切る。

○同・居間

麻耶と石井が向かい合って座っている。

食卓にはプラスチックトレイに乗った

惣菜とレトルトのご飯が乗っている。

麻耶「どうしたの？食べなよ？」

石井「……」

黙々と箸を進める二人

麻耶「おいしい？」

石井「出来合いの物が不味かったら困る」

麻耶「あ、そう。……静かだね。TVでも……」

石井「つけなくていい。食事は静かに取るものだ」

麻耶「あ、しまったお風呂……」

石井「沸かしておいた。風呂を沸かすのはおじいちゃんの仕事だ」

麻耶「おじいちゃんのこと？」

石井「家ではそれぞれ役割分担を決めてるんだ。食事を作るのは里子さんの仕事。里子さんが熱海に出かけてるから今週は麻耶が作る」

石井、箸を置いて立ち去ろうとする。

麻耶「え？もう？まだ残ってるよ」

石井「残りは郁子にやりなさい」

石井、去ると入れ替わりに仔猫が来る。

麻耶の前で甘えた鳴き声を出す。

麻耶「酷いねえ、お前はいつも爺ちゃんの残り物食ってるのか？」

麻耶、石井の食事の残りを仔猫に差し出す。ガツガツ食べる仔猫。

麻耶「郁子ねえ。お前は名前まで残り物なん だな。爺ちゃんに文句言ってやれ。僕はばあちゃんじゃにやいぞおつてさ」

意に介さずに食べ続ける仔猫。

○ 同・台所(朝)

パジャマ姿の麻耶が大欠伸をしている。

周囲に電子レンジのチンという音。

○ 同・居間(朝)

食卓にプラスチックトレイに乗った食事が並ぶ。

石井と麻耶が向かい合って座っている。

麻耶「どうしたの？食べなよ」

石井「今週はずっとこんな食事なのか」

麻耶「うん。駄目？」

石井「塩辛くて食べられん」

麻耶「え？おじいちゃん濃い口好きだった…」

石井「違う。……体に悪いだろ」

石井の食事を物欲しげにみつめる仔猫。

それを撫でる石井。

○ スーパーマーケット・中

カートを押す麻耶。その後に石井。

麻耶「猫の健康気遣う前に自分の健康気にしなよ。まだおばあちゃんの所に行くのは早いでしょ？」

石井「意味が分からん」

麻耶「は？」

石井「まったくアレはいつまで外国なんかに行ってるんだ。だから里子さんが旅行に行った

くらいで食事に困らないといけないんだ」

麻耶「おじいちゃん……」

石井、玉葱をカートに入れる。

石井「本当に作れるのか？」

麻耶「肉じゃがでしょ？もちろん」

木村光子(10)が石井をみつけ近寄る。

光子「あれ？郁子さんのご主人？」

石井「あ、木村さん……でしたっけ？」

光子「ええ、覚えてて下さったんですね。随分とご無沙汰してます。郁子さんのお葬式以来ですかね」

石井「え、……ええまあ」

光子「みんな寂しがつてますよ。全然顔出して下さらないんですもの」

石井「申し訳ないです」

光子「そんな謝らないで下さい。お一人でも構わないですよ。たまには顔出して下さい」

石井「ええ、まあ」

光子「約束ですよ。あれ？お嬢さん？」

石井「孫です」

光子「そう。どことなく郁子さんに似てらっしゃいますね」

石井「ええ、あ、はい」

光子「それじゃあ、また」

光子去る。

麻耶「今の人誰？」

石井「俳句倶楽部の知合いだ。アレと一緒に行ってた」

麻耶「へえ、おじいちゃん俳句なんてやるの？」

○ 石井家・居間（夜）

食卓には煮崩れた肉じゃがとご飯。

石井は黙々と箸を進めている。

ノートを眺めている麻耶。

麻耶「おじいちゃんなかなかロマンチックじゃん」

石井「人を冷やかすんじゃない」

麻耶「よく分かんないけどさ、これって恋とか愛とかを詠んでるんでしょ？ねえおばあちゃんのこと思って詠んでたの？」

石井「黙って食事をとりなさい」

麻耶「またそうやってはぐらかす」

石井「テレビでもつけよう。リモコンは…」

麻耶「食事は静かに摂るんでしょ？…もう1年近く新しいの書いてないね。辞めちゃったの？」

石井「…辞めたわけじゃない。休んでるだ」

麻耶「どうして？」

石井「一人で詠んでも楽しくない」

再び黙って箸を進めだす石井。

石井、箸を止め立ち上がる。

麻耶「あれ？もうおしまい？」

石井「風呂を追い炊きしてくる。肉じゃが作るのに時間がかかりすぎたせいで冷めてるはずだ」

麻耶「え？そんなにかかったかな？」

麻耶、棚の上に置いてある時計を見る

麻耶「だってまだ七時だよ」

石井「あの時計は止まってる」

麻耶「そうなの？電池換えようか？」

石井「しなくていい。電池を換えるのはアレの仕事だ」

麻耶「え？でも」

石井「アレがやるんだ。麻耶はやる必要ない」

石井去る。

入れ替わりに仔猫がやってくる。

麻耶「あぁごめんよ、お前も肉じゃが食べたいよな」

麻耶、小皿に肉じゃがをよそり仔猫に与える。

再び時計をみる麻耶。時計の針は19時を指したまま止まっている。

○ 同・客間（夜）

麻耶が布団を蹴散らかした状態で寝ている。

石井が慌てた様子で客間の戸を開ける。

石井「起きろ！郁子が！郁子が！！」

○ 同・居間（夜）

仔猫が床にぐったり横たわっている。

それを囲んでしゃがむ石井と麻耶。

麻耶「一体どうしちゃったの？」

石井「気づいたらグツタリしてて動かない」

麻耶「おーい！起きろ！」

石井「何がいけない？何か変なもの食べさせたか？」

麻耶「変なものって、私の肉じゃが？」

石井「肉じゃが…全部やったのか？」

麻耶「うん」

石井「どうしてそんなことするんだ。動物にタマネギをやったら駄目なことくらいわからないのか？」

麻耶「え？そうなの？食べるとどうなるの？」

石井「貧血になる」

麻耶「貧血。よかった死ぬわけじゃ」

石井「いいはずないだろ！病院に。早く！」

麻耶「ええ？こんな時間にやってないって」

石井「じゃあどうするんだ！？」

麻耶「とりあえず朝まで様子見て……」

石井「その間に死んだらどうするんだ？」

麻耶「貧血じゃしないでしょ」

石井「おい、郁子！起きろ！！郁子！！」

麻耶「おじいちゃん？」

石井「郁子…お願いだ…起きろ！起きろ！お前までいなくなつて……」

仔猫の前で泣き崩れてしまう石井。

麻耶「……分かった。深夜でも見てくれる所探そう。電話帳どこだっけ？」

麻耶、立ち上がった瞬間にバランスを崩し、仔猫の尻尾を踏んでしまう。

激しい鳴き声と共に目を醒ます仔猫。そのまま麻耶から逃げるように柵の上を上ろうとするが足を踏み外す。

柵の上の時計やノートや小物が落ちる。

それらの中に埋もれてしまう仔猫。

石井「郁子！」

石井、仔猫に駆け寄ると仔猫は違う部屋へと逃げていく。

麻耶「良かった。たいした事なさそうだ」

石井「……ああ」

麻耶と石井、小物を片付けだす。

時計を手にとると秒針が僅かだけ動き止る。

麻耶「あ」

石井、ノートを手に取り眺めている。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報告頂けますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まつての練習でのご利用。

・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

sunba1227@hotmail.com (岩本)